

あかし

プランニング・デザイン・総合印刷・オンデマンドデジタル印刷・可変データ印刷
 大判ポスター出力・データベース・PDF高速データ変換・CD-ROM制作
 3D・CGアニメーション企画・制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
 TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
 E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社新聞ビル

元気のでてくる“ことばたち” (126)

村上信夫

(アナウンサー)



Nobuo Murakami

父を体制側の人間として、許せなかった。本気で革命を起そうと考えていた。大学時代は、学生運動に身を投じた。

否情報を出す番組に協力した。思わず、被災者からの電話を取り「がんばろうね」と口にしていった。安否情報、生活情報のホットラインを市民レベルでも作ろうと、市民ボランティアネットワーク『がんばろう！神戸』を立ち上げた。震災6日後の1月23日のことだ。このスピーディーな動きを「支援でも奉仕でもない。可能性としての自分が行動に突き動か

■村上信夫プロフィール

NHKチーフアナウンサー
 1953年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、1977年、NHK入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50) これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。趣味は、将棋。著書に『元気のでてくることばたち!』(近代文芸社) 『おやじの腕まくり』(JULA出版局) 『いのちの対話(共著)』(集英社) 『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

まれていった。「学生時代バリケードを作っていたのに、今度はなくす立場に代わっていた。人と人の間の壁を取り払う役割を担っていた」。手の届かなかった『筑豊の子どもたち』が少しだけ近づいた気がした。

震災前は、「ちやほやされることが嬉しく、仕事の数の多さが喜びだった」。震災後は、「仕事を与えてもらうだけで、ありがたい気持ちになれた」。震災前は「そこそこ」で生きてきたが、死を直視してからは「生きる真剣さ」が違って来た。

感性を覚醒させる

俳優 堀内正美さん

写真集が変えた
 堀内正美さんといえば、『鳩子の海』『七瀬ふたたび』『ウルトラシリーズ』などで、ナイーブな表情を見せながら、ちょっと怪しい役、屈折した役：個性あふれる役柄を演じてきた。このところは、俳優としての活動に加えて、ボランティア活動に力を入れている。阪神淡路大震災をはじめ、事故や事件で命を落とした人々の家族の語らいの場所を設けて、共に涙を流し、共に励まし合う手伝いをしていく。

ていたが、運動に限界を感じて、演技という虚構の世界に逃げ込んだ。

蛭川幸雄演出の芝居にショックを受け、蛭川さんのもとで演出助手をしていたら、ひよんなことから俳優としてスカウトされることになった。1973年デビュー。「現実を見ないように、仕事場と家庭の間を行ったり来たり」していた。

俳優デビュー10年目の1984年、息子のアトピー改善のため、神戸へ移住した。「子どもにかこつけて東京からの逃避だった」。

震災が変えた

神戸に移って10年たった1995年の1月17日。この日を境に堀内さんは大変身を遂げる。地震直後、堀内さんの足は、自ずと地震の前年からパーソナリティをしていた放送局ラジオ関西に向かう。被災地の安



俳画/イネ・セイミ

かした」と振り返る。突きつけられた現実から逃避どころではなかった。

ルールは、「自発的、自己決定、自己責任」。被災者が必要とする「ニーズ」と支援者が提供出来る「シーズ」を繋いだ。ポストイットに、次々、欲しいもの、提供出来るものが書き込

2002年には、市民ボランティアネットワークは、発展的に(NPO)法人阪神淡路大震災1・17希望の灯り」となり、代表の歩道橋事故、池田小学校事件、JR福知山線脱線事故など、ほかの事件事故で亡くなった人や、その家族にも思いを馳せるようになった。

死に対して早く対応出来るのが神戸であるように思う。「絶望」を経験し「手を差し伸べてもらう」経験をjする中で、皮膚感

覚で哀しみを想像出来る都市になった。「哀しみを受け止め、涙を流して浄化出来る場が必要だ」と痛感している。うなずいて聞

父が変えた

若い頃、あれだけ反抗してきた父が10年前に亡くなった。死の間際「感性を覚醒しろ」と伝えられた。

ガンで入院している父を見舞い、ボランティアで活躍していることを嬉しそうに話した時のことだ。話せなくなっていた父は、力を入らない手でメモ用紙に走り書きで「感性を覚醒しろ」と書いた。

手術前日まで記していた父の日記には、自分の病状のことより社会への思いが綴られていた。家庭を顧みない父に反発していたが、父の感性は社会的な公益性に裏付けられたものだった。社会貢献活動との関わりが深くなった堀内さんは、常に感性を覚醒させながら活動していくことを肝に銘じている。



好評発売中

イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。



俳画教室開講中

ところ 常滑屋
 とき 月二回 第二・第三金曜日
 午後一時〜三時
 会費 一回 二二五〇円(三ヶ月分前納制)
 問合せ ☎〇五六九(三五〇四七〇)

フルート奏者 イネ・セイミ

「一音一音 いとおしむように 奏でる音色 貴方に幸せを届けます」

コンサート依頼はこちらへ ☎0563(32)0583 (セイミオフィス)

愛知県立大学名誉教授

山田正敏

『バリ島行ったり来たり』(16)



《伝統的な

『バリ島の村に住む』

③

— はじめて出会った

バリ島の家族 —

その家族とは、後に管理人を依頼した家族である。

両親と男の兄弟と末娘の五人家族である。

父親は、村人や子どもたちの通学の足となるベモ（小型乗合バス）の運転手。母親は家事従事を中心に、料理の腕の良さを見込まれて、近郷近在に毎日、仕出し。

子ども達は、私達が夏・冬休みを中心に、この村に本格的に滞在し始めた'98年当時、末娘コマンは、小学四年生。次男は六年生、長男は中学二年生。

私、この家族の一人と最初に出会ったのは、滞在地の下見に出かけた帰り道。妻の知人が、「この家は、私のファミリー」と、紹介し、挨拶に立寄った時である。

高台の滞在地と道路を挟んだ反対側。川にだれだれ森と竹藪を切り開いた敷地に、どの屋敷にもある祭礼用の家屋と住居用の家屋とがある。この家族の住居は、その裏側のわずかな平地に建つ、狭い家屋である。

夕方というのに、人の気配は感じられない。知人の声かけに、しばら

くして顔をそっと覗かせたのが、あけない顔つきの少女。留守番でもしていたのだろう。

なにを思ったのか、その知人がポケットから二、三枚の札を取り出し、それを差し出し「おやつでも買いなさい」と言葉を添えているようだ。

しかし、彼女は喜んで頂戴するどころか、頑なに断り続け、ついには断り続けるのみ。知人は、さし出した札と手のやり場を失い、困惑の表情。私も、この「あけない少女」のこの頑な態度には驚かされた。

それから一年有余、滞在地も定まり、家屋も建ち、この家族を管理人として、夏・冬の休暇を利用して二、三週間から一ヶ月余り滞在するようになった。滞在中、子ども達は、毎日のように学校からの帰宅後は、しばらくすると、わが家を訪れ家屋敷の掃除や庭作りを手伝ってくれる。末娘の彼女も、夕食の調理を妻と共に楽しそうに、手際よく仕上げている。

夕食後は、妻と子ども三人で、日本語の勉強。妻はインドネシア語の勉強。

この様子を見て、私などは、子ども達三人の学習意欲と集中力の高さには、あらためて目を見張るばかり。あの末娘コマンさん（バリの第三

子の通称）も、最初の出会いの時、知人に見せたあの頑な態度は、微塵だにない。それどころか炊事や部屋の掃除などの「家庭科の仕事」には、

機械や機械が随所に働き、その度に私が、うる覚えの片言単語で「バグー（すばらしい）」「ピンタール（かっこいい）」などと称賛すると、やゝ恥ずかしそうに小声で「サマ・サマ（お互いさま）」と、誉め言葉のような返事を返してくれる。

それにしても、あの彼女の頑な態度は何故だろう……。しばらく考えているうちに、一九三〇年代の「バリ島の暮らしと習わし」を自らの見聞録を中心に書き上げた、メキシコ人画家ミゲル・コバルビアス著『バリ島』（1号参照）の中に、それらしいことが記述されていたことを思い出した。

《バリの人の自尊心》

「バリの人の自尊心は、東洋の大職業のひとつが育つことを許さなかった。バリには乞食がないのだ。けれど、よそでは見られないこの特徴が、少年少女を金で釣って写真を撮る旅行者のせいで、今や脅かされている。近ごろでは旅行者のよく来るところで、人はサービスをしては金をせがむようになった。ふつうなら、子どもでさえ、見知らぬ人に何をせがんだことがわかったら、叱られ、恥ずかしいことだといわれるのだ。…」という一文である。

「見知らぬ人」に、「何かをせがむ」ことは、「恥ずかしいこと」と、バリ島の人たちは、子どもの頃から「躰」られてきた——というのである。後日、彼女に最初の出会いの様子を探ねたところ、あの「知人」は、彼女にとつては「見知らぬ人」であり、親からはこの記述どおりに躰られ、さらに彼女の場合は、「見知らぬ人」に、わけもなくお金や物を貰ってもいけない」と躰られて育ち、それが習慣になっていくから——と、納得のいく説明をしてくれた。

ゴバルビアスは、この一文に続いてこうも書いている。「：贈物は交換するものなのである。そのため、私たちは近所の貧しい人たちからお返しをもらって申し訳ないと思うことがよくあった。（中略）八歳の小さな踊り手に、たいしたものではないスカーフをあげたことがある。それからまもない日、彼女は米と卵と生きている鶏が一羽入った籠を届けにやってきた。その子が持つのは籠が大きすぎたので、運んできたのは母親だった。」母子一体の躰である。

「近所の子どもたちに傷の手当てをしてやると、いつも果物などを持ってきて、まるで気前のよさを見られるのを避けるかのように、何気なくうちのハウスボーイに手渡し、私たちには何も言わないのだった。子どもでさえ、自尊心というものをしっかり持っているのだ。…」

「自尊心」という言葉を久しぶりに読んだ。何冊かの辞書で、その意味を改めて調べてみた。今や日本では「自尊心」という言葉は「日常語ではなくなりかけてきている」といつて過言ではない。広辞苑ですら、『自尊心』とは「うぬぼれること」、『自尊心』とは「：他人の干渉を排除しようとする心理」と、排他的意味にもとれる説明がしてある。

しかし、表意文字である漢字の意味には、そぐわない。やっと「自分を立派だと信じようとする気持」（三省堂国語辞典）の説明を引き出して、ホツとした。

「自尊心」は、人間だれしも多かれ少なかれ持っている「気持」であり、人間をお互いに大切にしたい、尊重し合う、人間らしい気持の原点であると言つて、あのコマンさんも、高校進学にさ

いして、ポトン・キギという人間性獲得への通過儀礼を大勢の家族・親族・村人に囲まれて盛大に祝福され、一人前の成人に育つていった。

もよいのでは——、と改めて思い知らされた。

私が今まで接してきたバリの大人も子どもも、卑屈でも傲慢でもなく、淡々とした自然な態度で、親切に接してくれる。それもバリの人々が、このように幼い頃から自他ともに認め合える、細やかな人間らしい暮らし方や習わしを躰つけ、中味の詰まった「自尊心」を育ててきたからだろう。



バリ島の祭儀場

その頃、ぼくは、小学校の四年生でした。

ひとりっ子のぼくは、父と母にとっても可愛がられて大事に育ててもらったことを憶えています。

父は小学校の教頭先生でした。家庭ではやさしい父だったのですが、しつけはとてもきびしいものでした。

二年生の時、「さんすう」の問題で「七時五〇分」と言うべきところを「八時一〇分まえ」と答えて、ひどく叱られました。

試験やテストの朝は、午前四時に起こされ、顔を洗ってから勉強させられました。父も一緒に起きて、横でぼくの勉強の仕方をじっと見ていました。

恥ずかしいことですが、ぼくは、時どき寝小便をするくせがあつて、そそろをした朝などは、ひどく叱られ、おしりを何回もぶられました。母は黙って見ているだけで何も言いませんでした。

そういう叱られたことばかりを思い出すと、ひどくこわい父親のようですが、日ごろの父はぼくをとても可愛がってくれました。

ごはんの時でも、ぼくの好きなおかず、たとえば、みそ汁の中のニボシを、自分では食べないで、ぼくのおわんの中に入れてくれました。また、外で宴会などがあると、自分のごちそうには手をつけずに「おりづめ」にしておみやげとして家に持ち帰ってきました。

父は学校でもしつけに対しては、とてもきびしく「こわい先生」として全校の児童たちから「オニ先生」とおそれられていました。

そういう教頭先生の子どもですから、ぼくには親しい友だちはできませんでした。それに、ぼくが転校生だったこともあって、みんなは、ぼくを敬遠していたようでした。

そんなわけで、ぼくは孤独で、いつもひとり勉強ばかりしていました。「いま、勉強しない子どもは、ダメ

だ。人間として、最低だ」と、いうのが父の口ぐせでした。

その頃、村はずれの田んぼの中に、一軒だけりっぱなお屋敷がありました。

何でも東京の大きな会社の社長さんの家だということでした。

ある春の夜、ぼくは、そのお屋敷に行くことになりました。

どうして、そこへ、しかもひとりで行くことになったのか、今となってはまったく思い出せません。

その夜は、おぼろ月夜で、あたりいちめんにひろがる菜の花畑のまん中に、あかりのともったお屋敷がお城のように建っていました。

そのお屋敷で、ぼくは生まれてはじめて、十何段も飾られている豪華

が、おばさんと一緒に現れました。女の子は、ひなだんのおひなさまと同じくらい、あるいは、それ以上にかわいくて、きれいな子でした。

一緒にいるおばさんもやはりひなだんの官女さまに見えました。

官女さまはここにこして、女の子に話しかけました。

「ひとみさん、こちらが教頭先生のおぼっちゃん、こういちさん。勉強もよくできて評判の子ですよ。お友だちになれるといいわね」

「ひとみです。はじめまして。よろしくお願いします」

その子は少しはにかんで、大人びた口調で言いました。

よく見ると、ひとみちゃんは本当におひなさまみたいで、とてもともかわいのです。

思っていたので、食べませんでした。「こういちさんも、召し上がればいいのに」

ひとみちゃんはぼくをいたづらっぽい目で見ながら、笑いました。よく笑うかわいなおひなさまだとぼくは思いました。

それから、おひなさまと官女さまが歌いはじめました。

あかりをつけましたよ ぼんぼりに お花をあげましょ 桃の花

「こういちさんも歌ってくださいな」

官女さまが言いましたが、ぼくは、女の子の歌には興味がないし、それに、何だか恥ずかしくて歌えませんでした。

ひとみちゃんは黄色いセーターに白いスカートでしたが、歌を聞いて

とてもきれいで、優雅でした。ぼくと、ひとみちゃんは、気がつく、手をつないで歩いていました。ひとみちゃんの手はとてもあたたかく、やわらかいのです。

その時、ぼくは自分が大人になったら、このひとみちゃんをお嫁さんにもraitたいと思いました。

そのためには今、ここでひとみちゃんにお願ひしておかなければ、と思つて、口に出そうとした時、ひとみちゃんが大きな目で、ぼくを見つめて言いました。

「こういちさんは、まじめで、やさしい男の子ね。わたし、そういう男の子が好きよ。これからなかよくしてくださいね」

ぼくはうれしさを胸がいつぱいになって、大きくうなずきました。

ひとみちゃんのかわいい後ろ姿が、いちめん菜の花畑に消えてしまうと、ぼくは、やっと自分の家の近くまで来ていたことに気づきました。

それから、ぼくは、二度と、ひとみちゃんに会うことはできませんでした。なぜなら、ひとみちゃんは、東京の方にある家の都合で、あの日後に突然、東京へ帰ってしまったのでした。

そして、さらに数年後、ひとみちゃんが突然、病気で亡くなったことを風の便りで聞きました。ぼくが中学三年生の受験勉強中の冬のことでした。

早いもので、ひとみちゃんと出会ってから、五十年がたちました。

ぼくは、今でも、ひとみちゃんにもらった「おひなさま」を大事にして、かわいかったひとみちゃんを思い出しています。

五十年もたつというのに、おひなさまは、少しも古ぼけることなく、むしろ、年ごとに一層新しくきれいになってくる感じですよ。

つい先日、ぼくの母親が、九十二歳で亡くなりました。介護の床で、ぼくは、あの田舎の菜の花畑の中にあつた「お屋敷」のことを聞きました。すると、母親は、あそこにはお百姓さんの小さな物置小屋があつただけで、「お屋敷なんて、なかつた」と、はっきりした口調で言いました。

お葬式のあと、ぼくは、クルマであの場所を訪ねてみました。そこには立派な市立の図書館が菜の花にかこまれて建っていました。

童話

おひなさま

愛知淑徳大学教授
堀尾幸平

なおひな飾りを見たのです。ぼくたちの田舎には、女の子のいる家なら、どの家にもおひなさまはあつたのですが、そのお屋敷のおひなさまほど、華やかでりっぱで、堂々としたものは、どこにも見ることはできませんでした。

「うわあ！」

ぼくは、お座敷いっばいに飾られたおひなさまを前にして、思わず叫んでしまいました。

そうして、挨拶も忘れて、しばらくぼうぜんとして見とれていました。もちろん、おひなさまは、写真や絵で見えてはいましたが、実際に間近かに見るのははじめてで、少年のぼくにとても大変な驚きでした。

われを忘れて、見とれていたぼくの前に、ぼくと同年くらいの女の子

が、おばさんと一緒に現れました。女の子は、ひなだんのおひなさまと同じくらい、あるいは、それ以上にかわいくて、きれいな子でした。一緒にいるおばさんもやはりひなだんの官女さまに見えました。

ぼくは、胸がドキドキしました。官女さまは、ひなだんにかざつてあつた白酒を手にとると、ぼくに「いってくださいました。白酒は「みかん水」で、とてもおいしかったです。「まあ、こういちさんはひとみさんと並ぶと、まるでお内裏さまのようですね。ふたりともよくお似合いです。ごいませよ」

官女さまが、口に手を当てて笑いました。

それから、ぼくはおひなまんじゅうをいただきました。桃色、黄色、緑色と、色のついたごはんつぶがついていて、見るからにおいしそうでした。ひとみちゃんは、すぐ食べはじめましたが、ぼくは、ひどく緊張しているうえに、父親と同じように、家へおみやげに持って帰ろうと

いるうちに、五衣の唐衣と綿でふくらんだ袴を着けて、檜扇を持つおひなさま姿に見えてきました。

ぼくはうつとして右大臣、左大臣、三人官女、五人囃子たちと一緒にひとみちゃんの歌を夢のような気持ちで聞いていました。

五人ばやしの 笛太鼓
今日のはたのしい ひなまつり
お歌が終わると、ひとみちゃんが、ぼくを家まで送ってくれることになりました。ぼくは、男の子です。女の子に夜道を送ってもらうわけにはいけません。ぼくは、首をふつてお母さま官女に言われて仕方なく、送ってもらうことにしました。

広いお屋敷を出ると、いちめん菜の花ばたけでした。おぼろ月夜に浮かぶ菜の花が春風にやさしくゆれて、

「いいから、もらつておいて！」
ひとみちゃんは、無理やりぼくにおひなさまを渡すと、あわてて走り出しました。

愛知淑徳大学文学部教授



